陳舜臣さんを語る会通信

NO.67　May.　2022

発行　兵庫県明石市北朝霧丘2-8-34
橘雄三方「陳舜臣さんを語る会」
Tel. 078-911-1671
編集　「陳舜臣さんを語る会通信」編集委員
発行日　2022年5月1日

歴史小説の短編集2冊『胡蝶の陣』と『五台山清涼寺』

陳舜臣さんの短編集は20冊を超えますが、そのほとんどが推理小説で、歴史小説の短編集となると『胡蝶の陣』『五台山清涼寺』ぐらいしか思い浮かびません。本号ではこの２冊を取り上げました。単行本刊行は『胡蝶の陣』(毎日新聞社 1979)、『五台山清涼寺』(徳間書店 1990)です。　　(編集委員　橘雄三)

徳間文庫版 表紙

『胡蝶の陣』「初刊本あとがき」より抜粋　(傍線は編集委員)

最初の短編歴史小説集

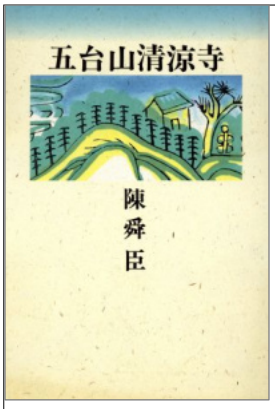
これまで私は何冊も作品集を出しているが、歴史小説だけを収録したのは本書が最初である。

『楊貴妃は覇水を見た』にふれた箇所

『楊貴妃は覇水を見た』は、一九七二年の秋、中国へ旅行する直前に書いて、雑誌社に渡した作品であった。魯迅は戯曲『楊貴妃』を書こうとして、その取材のために西安(かつての唐のみやこ長安)へ行ったところ、それまでのイメージがこわれたのか、かえって書けなくなったという。時代としては、私は唐が好きである。唐のシンボルである楊貴妃は、いちど書いてみたかった。西安へ行くと、魯迅のように書けなくなるかもしれないと思って、その前に私はこの小説を書くことにした。わらい話じみているが、かなりまじめにそう考えたのである。脱稿して半月後に私は西安へ行き、楊貴妃もはいったという華清池の温泉に遊んだ。しかし、その旅行によって、私は楊貴妃も含めて、唐が書けなくなるとは思わなかった。ただ、西安へ行ったあと書けば、まったく別の作品になったという気はする。

徳間文庫版 尾崎秀樹「解説」より抜粋　(傍線は編集委員)

(陳舜臣氏は)長編や連作とはまた別の素材を生かして、歴史短篇をも書いているが、しかしその量は比較的少ない。ひとつには「枯草の根」で第七回江戸川乱歩賞を受けて文壇にデビューした彼は、以後、推理小説を多く手がけ、短編ではミステリーに主力を注いだためではなかろうか。そして、「阿片戦争」を書く頃から、長編でしか描けないような大きなテーマがつぎつぎにふくらみ、歴史短篇の筆をとるのは、彼の好む素材に出会ったときだけに限られたのではないかと思われる。



徳間書店版単行本 表紙

『五台山清涼寺』「あとがき」より抜粋引用　(傍線は編集委員の加筆)

本を読んでいて、ふと行間から、なにかがにおってくるような気がすることがある。それが歴史書であることもあれば、新聞であることもあるが、その行間からこぼれたひとかけらから、一つの物語が構成できるのではないかとおもう。小説家のさもしさ、と言われるかもしれないが、これまた一種の「業」であろう。

すぐれた古生物学者は、下顎の歯一本の化石から、化石人類の顔ぜんたいを復原できるという。それは学問的な根拠に裏づけられた作業だが、小説家の物語づくりは、とうぜんもっと恣意的である。たいてい自分の好みに合うようにつくりあげるようだ。

本書に収めた諸篇は、ほとんどがそのような成立の仕方をしている。そして、すべて史書を読む過程で、においのする「かけら」を拾って細工したのである。

すべてがフィクションであることはいうまでもない。ただ、そのもととなった化石のかけらは、ある作品では大きく、ある作品ではあるかなきかというほど小さい。本の表題となった「五台山清涼寺」は、もとにしたかけらが最も大きかったようにおもう。

作中に引用した出典は、ほとんど実在のものであり、引用にあたって、歪曲しないことを期した。それをルールと心得たのである。

私が念願したのは、私のつくったフィクションから、その時代の輪郭ができるだけはっきりと浮かんでくるようにしたい、ということだった。

すぐれた小説は、作品と同時代の実録や文献以上に、その時代を読者によりよく理解させるものなのだ。もっとも私の作品がそれにあたると言うつもりは、さらさらないが、すくなくともそれをめざしたつもりである。

一九九〇年七月　陳舜臣

『胡蝶の陣』 所収各編内容 及び補足

各編題及び初出	『胡蝶の陣』各編内容
楊貴妃は 覇水(はすい)を見た 『小説新潮』 昭和47年12月号	ある日、楊貴妃に温泉に入れという、玄宗皇帝の命令が伝えられた。宮廷のしきたりでは、皇帝の寵愛を受ける宮女に、そのような命令が下るのである。楊貴妃はむろんその意味を知っていた。楊貴妃はうつむいて半ば目をとじていた。肩がかすかに揺れていたが、おそれおののいていたのではない。楊貴妃はふしぎに冷静になれた。玄宗皇帝に見染められ、最期には殺された楊貴妃の一生をたどる　　廣済堂文庫版表紙 →
パミールを越えて 『小説歴史』 昭和50年夏号	高仙芝(こうせんし)は唐の玄宗時代の名将。高句麗系の人。 高仙芝は、一万の兵を率い、沙漠を進み、パミールを越え、小勃律国(しょうぼつりつこく　現在のカシミールの北)に遠征、これを滅ぼし、吐蕃(チベット)の勢力が西域諸国に及ぶのを断ち切る。751年、タラス河畔の戦でアッバース朝(イスラム)軍に大敗。この戦で捕虜になった唐兵のなかに紙すき工がいて、イスラムに製紙法を伝えたといわれている。755年、安禄山討伐の実質的司令官となるが…
落日孤雲 『小説歴史』 昭和50年9月号	蒙古軍の再包囲で、城内に地獄絵図がくりひろげられた。封鎖によって食料の供給は久しくとだえている。百姓、食尽キ、以テ自ラ生クル無シ。金王朝は滅亡した。元好問(げんこうもん)はしばらく抑留され、のち自由を回復したが、いくら勧誘されても元朝には仕えなかった。亡国の民として、滅びた金国の記録を蒐集することに一生を捧げたのである。国の滅亡という危機に、金王朝の歴史を後世に伝えようとした大詩人元好問の史話
胡蝶の陣 『小説現代』 昭和46年1月号	賊は風のようにあらわれた。やっとのことで、賊の眼をのがれることができたが、陳可願の家族は、みな殺しにされていた。倭寇といっても、もとはただの武装貿易商人なのに。あの胡蝶の陣の白扇のゆらめきは、その後、陳可願の夢になんどあらわれたかしれない。悪夢である。陳可願には片時も忘れられないことがあった。それは、復讐である。父母を殺した憎き倭寇の得意の戦法「胡蝶の陣」。地主の息子陳可願が奇策をもって…
シンカンの若者 『小説新潮』 昭和47年3月号	オランダが台湾にはじめて上陸したのは、一六〇四年のことだ。オランダは東インド会社をつくりパタビアに貿易基地を置いたが、商売としては有利な対日貿易のために、台湾に進出したのだ。日本人を父にもつ台湾の青年ヤタロウはオランダ人に雇われるが、オランダ人の横暴さに目覚め、彼らと対抗するために、日本人商人に近づいていった。オランダの台湾占領時代、日本人を父にする台湾の青年ヤタロウの波乱の台湾裏面史
海山仙館記 『別冊文春』 昭和47年新春号	まさかと思われる出来事がおこった。潘家が倒産した。栄枯盛衰は世の常とはいえ、あんなにながく我が世の春を謳歌していた塩商潘家にも、だいぶ前から衰えの兆しはあったのだという。海山仙館の豪華ぶりを見せつけられていた市民には、とても信じられないことであった。広州の塩商・潘家の豪邸「海山仙館」を宝くじで当てた貧乏教師呉節…

台湾を舞台にした陳舜臣小説

陳舜臣さんの小説で、台湾を舞台にした作品は非常に少ない。台湾を舞台にした作品とはっきり言えるのは、『怒りの菩薩』と『胡蝶の陣』所収の「シンカンの若者」ぐらいです。あと、『鄭成功(原題旋風に告げよ)』がありますが、台湾が舞台になっている場面は、物語の最後にわずかあるだけです。

ほかにあるのでしょうか。

そういう意味で、「シンカンの若者」は貴重で作品です。主人公の若者ヤタロウの母親はシンカン社の女性ですが、父親は日本人です。そして、そのことを知らず、台湾の蕃社の一つ、シンカン(新港)社の若者として成長します。時代は十七世紀前半、東南アジア、東アジアにオランダ東インド会社の勢力が伸長、台湾にその拠点を築こうとする時代です。

左の画像は尚文社発行電子書籍「新港(シンカン)の若者」の表紙です。

『胡蝶の陣』所収「パミールを越えて」の初出は『小説歴史1975夏号』

『歴史読本別冊』創刊号/1975夏『小説歴史』（定価430円、購入価格は千円+送料204円）を入手しましたので、ここに紹介します。下に引用した『胡蝶の陣』の頁数は徳間文庫版による。　（編集委員　橘雄三）

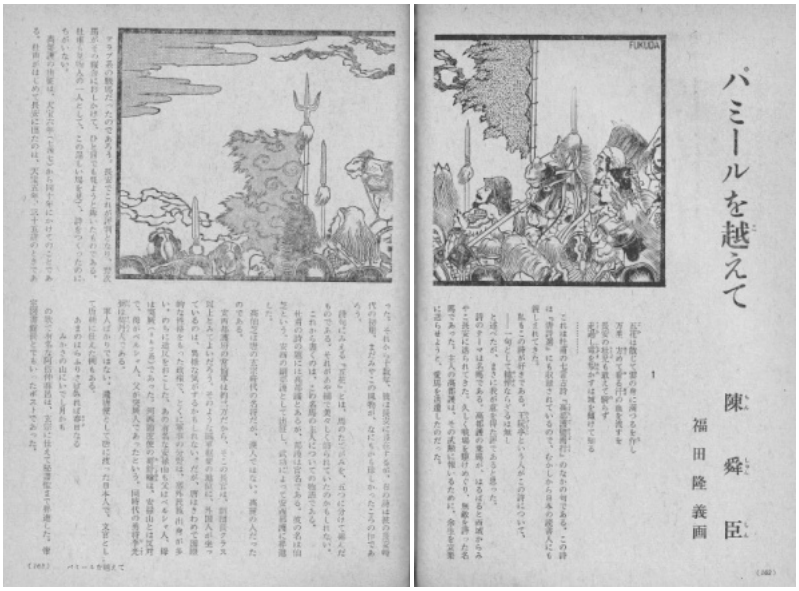
『小説歴史』一九七五年夏号表紙

表紙・石坂浩二画。
主たる執筆陣に陳舜臣の名も見えます。

同号　目次の一部

「パミールを越えて」掲載頁

福田隆義画。



『小説歴史』一九七五年夏号には、「パミールを越えて」の全文が掲載されています。紙の質、印刷、ともに悪い上、頁の中までヤケがひどく、非常に見にくいですが、47年前の雑誌とおもえば納得です。

高都護(高仙芝)の乗馬が、はるばると西域からみやこ長安に送られてきた。久しく戦場を駆けめぐり、無敵を誇った名馬であった。主人の高都護は、その武勲に報いるために、余生を安楽に送らせようと、愛馬を送還したのだった。長安でこれが評判となり、野次馬がその厩舎におしかけて、ひと目でも見ようと犇いたものである。（徳間文庫版 p.58－59）

これは冒頭の記述ですが、挿絵は、高仙芝がこの名馬に乗って出陣する場面のようです。

■高仙芝（～755）　高句麗系の唐の武将。西域経営に功績をたて安西都護となる。

751年、タラス河畔の戦でアッバース朝（イスラム）軍に大敗。この戦で捕虜になった唐兵のなかに紙すき工がいて、イスラムに製紙法を伝えたといわれている。

もう一つの挿画の場面です。高仙芝が、小勃律国を倒した勝利報告を、上司の夫蒙将軍にではなく、直接、都長安に送ったことに対し、夫蒙将軍が激怒する場面です。

『旧唐書』のこの場面、河西の節度使夫蒙将軍が高仙芝を罵るところは、まことに下品な言葉づかいである。夫蒙将軍の言葉を、そのまま写したのであろう。

噉狗腸高麗奴(犬のはらわたを食べる朝鮮人)、噉狗屎高麗奴(犬の糞を食べる朝鮮人)！

と、夫蒙は高仙芝を罵った。（同 p.81）

『五台山清涼寺』所収各編内容 及び補足

題　初出	『五台山清涼寺』　各編紹介
日鋳の鏡 『オール讀物』 昭和62年11月号	三世紀前半、いわゆる三国時代。舞台は会稽(今の浙江省紹興)の日鋳嶺山麓。この地は春秋末期に欧冶子(おうやし)という刀剣作りの名匠を出している。後漢時代は鏡作りで名を馳せたが、呉の版図となった今、剣など武器作りを強いられていた。日鋳の人たちは剣よりも鏡を作りたくてしようがない。そんな日鋳嶺に、二年前に失踪した青年・伏良が戻ってきているという。彼は倭の国へ行っていたとの噂だが…。日本で出土する三角縁神獣鏡と伏良に関連はあるのか？　三角縁神獣鏡イメージ ➔
天魔舞の鐘 『野性時代』 同53年10月号	元末、順帝(位1333-1370)の治世。主たる登場人物は厳安福と羅忠。厳安福は皇帝御用の物品を製造する官署の長官。羅忠は、祖父も父も鋳造の名匠といわれた職人で、彼自身、大鐘を鋳造するという夢を持っていた。二人は幼馴染みで、身分を越えた間柄であった。厳安福は羅忠の夢を叶えてやりたいと、順帝の寵臣、チベット僧の哈麻(ハマ)に巨額の謝礼金を積む。甲斐あって、厳安福に巨鐘鋳造の勅令がくだる
紙は舞う 『小説新潮』 同53年6月号	北宋の末期、第八代皇帝徽宗(位1100-1125)の時代。都汴京(べんけい　今の開封)の盛り場に、「兪敬之(ゆけいし)の店」と呼ばれる「切り紙細工」を見せる小屋があった。「切り紙細工」といっても三国志の豪傑などの庶民的な切り絵ではなく、王羲之や顔真卿の字体など、客の注文によってそれに似せて切り抜くというハイレベルな芸で客種が違っていた。この店の常連になれば、ただ者ではないと尊敬された
舌聖一代 『小説新潮』 同51年4月号	16、7世紀、明の時代。泰州(揚州の東)の人、曹逢春の講釈師一代を描く。アバタ面で色が黒く、子どもたちの戦争ごっこで、いつも悪役ばかりやらされていた逢春少年は、ガキ大将の次にえらい「語り」という役がやりたく、講釈師に弟子入りする。稽古の意気込みと生まれついての話術の才能で、師匠が「もうわしには、おまえに教えることはない」と言ったのは、曹逢春がまだ二十歳になったばかりのときであった
五台山清涼寺 『オール讀物』 同61年7月号	明朝の崇禎帝が自殺し、清朝の順治帝が紫禁城に入ったのが一六四四年、混乱の時代である。そんな中を避難する江蘇の大地主冒襄は、暴徒となった明の南京亡命軍に愛妾董小宛を奪われる。冒襄は必死になって愛妾を探し始める。どうやら紫禁城深く、清の後宮にいるらしいとの情報を得る…
花咲く月琴 『小説現代』 同52年10月号	1856年のことである。舞台は太平天国の都天京(もとの南京)。東王楊秀清は、清朝軍の主力である湘軍の総帥曾国藩の諜報活動に神経を尖らせていた。楊秀清は、曾国藩の間者と狙いを定め、月琴の名手張圭と娘若蘭、そして放浪画家の殷敬風を捕らえるが、状況証拠のみで、物的証拠が掴めない…
虎たちの宝 『小説現代』 同53年10月号	アーサー・ウィルソンのことを取材しようとして、「私」は香港で楊守徳に会う。日中戦争時、中国に、P40型機を根幹とする空軍外人部隊があった。彼らは愛機の頭部に二つの大きな目玉と、その下にノコギリのような牙を描き込んだ。人々はそれを「フライング・タイガーズ」と呼んだ。1941年12月、日米が開戦し、この空軍外人部隊は正式にアメリカ軍となった。「フライング…」は戦闘面だけではなく、輸送面でも活躍した。アーサー・ウィルソンの仕事は、「フライング…」を操縦し、インド・重慶間を飛び物資を運ぶことだったが…

補足　順治帝と五台山清涼寺

題名「五台山清涼寺」の由来ですが、この話は、ここ以外にも陳舜臣作品のいくつかで目にします。その一つ、手もとにある講談社文庫『中国の歴史六』(p.486)から転載します。

順治(じゅんち)帝は二十四歳で死にましたが、世間では出家して五台山清涼寺にはいったのだという噂(うわさ)が、かなり強く流れていたようです。順治帝は愛する董(とう)貴妃の死を悼み、出家する決心を変えなかったので、やむをえず死去したことにしたといわれています。息子の康熙(こうき)帝は、熱烈な朱子学信奉者であったのに、五台山へ五回も行っていること、そのとき太皇太后や皇太后を伴っていること、そしてある時期(順治帝がほんとうに死んだとおもわれるとき)以後、五台山へはまったく行かなくなったことなどが、噂の根拠となっています。

集英社文庫版表紙